HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「帝国自由経済協会」論
Author(s)	山本, 敏; Yamamoto, Satoshi
Citation	スラヴ研究, 9, 15-41
Issue Date	1965
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4975
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113200.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「帝国自由経済協会」論

山　本　敏

序　言
Ⅰ　概観と資料
Ⅱ　帝国自由経済協会通史　（以上本号）
Ⅲ　その役割　（次　号）

序　言

帝国自由経済協会は1765年に設立され，1915年まで存続した。150年間である。18世紀の後半に設立されたこの団体は，ヨーロッパ各国における同種の団体の中，第52番目のものであった。しかし，その存続が一世紀半にも及んだものは他に一つもない。それを異常と言うならば，この異常さの正体を明らかにすることは，ロシヤにおける生産力発展の跡をたどる中で，私が数年前にぶつかり，なお必ずしも熟したものとし，昇華し切れないできた一つの課題である。

一般に「生産諸力」の発展をロシヤの資本主義期について考究するとき，誰が社会的生産の組織者であり，推進者であったかという問題にとりくむ以前に，「生産諸力」そのものの内容が具体的に把握できないことに，私はまづ戸惑った。全ロシヤ的な規模での生産用具の一覧表も得られないし，人口統計も充分でない。このままで，政治史と併列に，ロシヤの資本主義期の「生産諸力」発展を考察するのは，私には足踏みせざるを得ないものがあった。そのような疑念が本稿において解明されたわけではなく，依然として底流をなしている。

帝国自由経済協会の全活動についてまとめて発表されたのはヴェ・ヴェ・アリョーシキン氏の著作[1] 以外にない。帝国自由経済協会の150年間という長い存続期間とその活動の内容とが，漸く1963年になってはじめて一冊のものにまとめられたということは，やはりそこに何か異常なものが感ぜられる。まだ若い著者アリョーシキン氏の科学アカデミー経済研究所における地位や，彼によって出された書物の装幀のお粗末さもさることながら，アリョーシキン氏を迎えるまで，総計281冊に上る "Труды Вольного Императорского экономического общества"「自由経済協会報告」が放置されていたことの異常さは，予め記しておくことが必要であると思う。

もちろん，アリョーシキン氏とその上司であるカラターエフ教授から直接，間接に幾多の指示，指摘をうけたことは，私がこの協会の活動を全体としてとらえるためにひじょうな力になっている。

1）В.В. Орешкин; Вольное экономическое общество в России 1765–1917, АН СССР, 1963

この論攻の素材は，協会内部の手になる三つの通史（100年目のもの及び次の25年間のもの二つ）の他，レーニン図書館所蔵の“Труды”と協会のアルヒーフを骨子とする。したがって，アリョーシキン氏の用いた資料と大差はない。しかし，過不足なく編年別に通史を組立てるほど充分に“Труды”やアルヒーフを検討する機会には恵まれなかったので，本稿の第二部は結局アリョーシキン氏の辿った跡を追う形になった。

また、キンダースレイ氏がロシヤにおける「修正主義者」を追求する中で行ったВЭО評価の手法[1]は、第三部において大いに参照した。

I　概観と資料

自由経済協会150年の活動に参加したのは，経済の理論家ばかりでなく，農工業の実際家，商人，医者，退役軍人等々で，それらの政治的傾向は種々さまざまであった。ただ，一貫して言えることは，地主（時期によって焦点の置きどころに大，中，小のちがいはあるにしても）の経営にとって有利な資料を提供することが，協会の一つの重要な課題であった。農奴主地主ばかりでなく，自由主義的な貴族やブルジョアジーも，程度の差こそあれ，均しく農工業の生産力発展に関心をもっていた。

協会が出した出版物は300種に近く，それを部門別に区別してみると，農耕及び畜産，農業機械化，採取産業，加工産業，農工業に関するもの，国家財政及び金融に関するもの，商業及び商業政策に関するもの，さらに，医療及び国民教育に関するものに分けられる。

また，協会は数次にわたって懸賞論文を募集したが，1861年の農民改革を迎えるまでに出した懸賞論題は243に及び，そのテーマは畑作，植産，畜産，その他一般に農業問題，医学及び獣医学，採取及び加工業，住宅及び営業用の建築，農業機械の製作等がその主体をなしている。たとえば，「農民が土地を所有するか，あるいは，農民は動産のみを所有するか，何れが社会のためになるか」，「賦役か小作か，農奴労働か自由雇傭労働か—経営主にとっては何れが有利であるか」，「所領を如何に合理的，かつ経済的に管理すべきか」「世襲領における農業生産と農奴たちの工業労働とを如何に結合させるか」，「ロシヤにおける農民解放の歴史」等々である。

協会の活動綱領は「農耕及び家屋建設に関する，さらに，広くロシヤ帝国の経済の全部門について，宣伝と普及をすること」であった。

このような帝国自由経済協会の活動は，地主経営が必要とするところにその範囲を限られていたが，ロシヤにおける生産力の発展に大きく寄与したことは言うまでもない。そこに本稿で帝国自由経済協会をとりあげる所以がある。

通史についての協会内部からの公式資料は次の三つである。

1.　ア・イ・ホドネフ：帝国自由経済協会の歴史，1965[2]

2.　ア・エヌ・ベケートフ：帝国自由経済協会の1865年から1890年まで25年間の活動の歴史的概観，1890[3]

1）R.K.Kindersley, The First Russian Revisionists, 1962

2）これは創立100年に当って当時，協会書記をしていたホドネフが誌したもの

3）ベケートフは当時協会書記

3. エム・エム・コバレフスキー：150年記念によせて，1915[1)]

この三つをつなぎ合わせると，一応存続150年間が断絶することなくつながるわけである。しかし，それぞれの筆者の主観の相異や，それぞれの時期における協会の姿勢の相異もあって，必ずしも平板に結びつけるわけには行かない。これ以前に創立30周年に際して書かれたア・テ・ボロトフの「現代の人々と後代のための覚書[2)]」があるが，これは遂に印刷されないままであった。

この他，1850年代の終りに農業問題の理論家として論壇にあったペ・ア・ムルロフが18世紀末期の協会の業績を注目している[3)]他，150周年に際してコワレフスキーと前後して「農業報知」誌上にヤリロフ，ア・ペ・メルトヴィー，ヴェ・ヴェ・ヒジニャコフ，ベ・ベ・ヴェセロフスキー，エス・エヌ・プロコポヴィッチ，イエ・デ・クスコーヴァヤが協会の活動について短文を掲載している[4)]が，これらは何れも協会の活動に批判的なものではない。自由経済協会の活動について述べた十月革命以前の文献に特徴的なことは，アリョーシキン氏によると，「支配階級のイデオロギーや，ロシヤ社会の農奴主的貴族，自由主義的貴族およびブルジョア自由主義的なグループの意見のたたかいを述べた経済的業績の分析をなおざりにしていることである。」[5)]もちろん，マルクス主義の手法による論考がまだ普遍的なものとなっていなかった時期においては，これは当然のことである。この点について充分な論議をすすめるためには，大部分が未刊のままになっている協会のアルヒーフを用いるよりない。

ソヴェト時代になってからも，前述のごとく，帝国自由経済協会の活動を全体として分析したものは，アリョーシキン氏のものの外は皆無である。ただし，18世紀後半の協会創設当時の活動を分析したものに，マヴロージン氏のもの[6)]がある。科学アカデミー経済研究所を中心としてかなり大がかりに編集された「ロシヤ経済思想史」[7)]の中では自由経済協会の活動について第1巻第1部の中でわずかに取扱われているにすぎない。この「18世紀の60年代から90年代までの主要な経済問題」の章を書いたイ・エス・バーク氏は，ここでは単に1765年に協会の行った「土地所有権」についての懸賞論文のいくつかを分析しているにすぎない。バーク氏は別の著書で，このことにさらに詳細な叙述をしている[8)]が，懸賞論文の筆者ア・ヤ・ポレノフをはじめ一連の経済思想家たちを，自由経済協会の活動を中心としてではなく，封建農奴主に反対するものの流れとして叙

1）コバレフスキーは当時会長である。これはこの時期にはすでに直接協会の出版物として出すことができず「ヨーロッパ報知」誌15号に載せられた。

2）これはシチェドリン名称図書館の手稿部門所在。

3）П.А. Муллов, Забота об улучшении быта крестьян во второй половине XVIII века. Записки императорского Казанского экономического общества, Казань, 1859, № 3,4,8

4）Вестник сельского хозяйства 1915, № 44,49,51,52.

5）Орешкин, Там же, стр.7.

6）В.В. Мавродин, Крепостнический характер дворянского предпринимательства конца XVIII и начала XIX в.,"Проблемы истории докапиталистических обществ" №4, 1934

7）Институт экономики АН СССР, История русской экономической мысли, 1955

8）И.С.Бак; Антифеодальные экономические учения в России второй половины XVIII века, стр. 39 以下

述している。そしてこれは，自由経済協会のアルヒーフを全然資料として用いていない。アリョーシキン氏の著書を迎えるまでに，自由経済協会の創立や初期の活動についてもっとも詳細な性格分析をしているのは，エヌ・カ・カラターエフ教授の「18世紀ロシヤの経済学史概説」[1] である。しかしこれも，この著作の表題によって明らかなごとく，とくに自由経済協会の活動を取扱ったものではない。賦役労働による所領経営の生産性を高める上で，自由経済協会の役割を評価しているが，それは必ずしも具体的な数字にもとずいて生産力の向上を論じたものではない。ただこれは，協会のアルヒーフを資料として論述している点に，バーク氏のそれをさらに進めたものであるということができよう。以上のような素地の上に，パシコーフ，フローモフ，カラターエフ等の諸教授の下でアリョーシキン氏の著作が生れてきた。アリョーシキン氏は経済思想史を専門とする研究者である。そのアリョーシキン氏が経済思想史の面から「帝国自由経済協会」の研究にとりくんでいることは，別に驚くに価しないことであろう。私にとって興味あるのは，かれが「独創的なロシヤ経済思想の代表者たち」として挙げている人の中に，メンデレーエフが入っている[2] ことである。すなわちかれは，ロシヤの経済的発展を求めて努力してきた人たちとして，経済学周辺の多数の人々を考えているのである。農業と工業の発展のために，有益な知識と技術の普及につとめてきた一連の人々を，同じ系列の上に考え，その媒体として自由経済協会をとりあげるのである。

II　帝国自由経済協会通史

ー　創立をめぐって

帝国自由経済協会が設立された18世紀の後半からさかのぼって約10世紀の間，ずっと続いてあったのは封建的な生産様式である。

この封建的生産様式はすでに発展の極に近く，主要な生産要素である土地にたいする農奴主たちの封建的な所有権と，生産者農民を農奴として土地に緊縛しておくこととは，生産力の原動者としての意義を失い，むしろそれを抑制する者として作用しはじめていた。

一方，この時期になると，封建農奴制経済の内部に新しい資本主義的ウクラードの萠芽が発生し，社会的分業はすすみ，工業の発展と商品，貨幣関係の拡大が深化してきた。このことは，マニュファクチャーの数の増大によってだけでも明らかである。

時期を18世紀にとってみると，ロシヤ産業が依拠していたのは，その殆んどが農奴の労働である。たとえば，生産高から言えば当時世界第一であったウラルの鉄鉱生産にしても，周知のごとく，農奴農民の労働によって経営されていた。その頃ロシヤで行われ

1）Н.К. Каратаев, Очерки по истории экономических наук в России XVIII века, 1960
2）他にロモノーソフ，ラジーシチェフ，デカブリスト，ゲルツェン，ミリューチン，ドブロリューボフ，チェルヌィシェーフスキーがある。

ていたマニュファクチャーは，貴族たちの世襲地(ヴォトチンヌイ)マニュファクチャーと農奴占有(ポセシオンヌイ)マニュファクチャーとに大別されるが，それを動かしていた労働力は，農奴身分のままの農民たちの「工場づとめの賦役(ファブリーチナヤ バールシチナ)」労働である。まだ一般に，雇傭労働力によって経営されている資本主義型の産業マニュファクチャーは殆んど姿をあらわしていなかった。つまり労働力たるべき農民の身分上の拘束が労働力の商品化を妨げ，同時に，資本主義型企業の成長を妨げていたのである。さらに言うならば，肝心のそれらの産業企業を組織すべき人たち，すなわち，新たに興った商人層と富裕な農民たちそのものが，依然としてまだ農奴的な身分制に拘束されていたし，雇傭労働力は大部分が国有地又は地主所領の小作農民であった。しかしそれにもかかわらず，このような生産形態の中から，主として軽工業，とくに繊維工業において資本主義的ウクラードが生じてきたのは，既存の生産形態が生産力の発展にたいする内外の要請に応えられなかったからに外ならない。

18世紀の中葉において，ロシヤの主産業は言うまでもなく，農業である。その農業生産の基盤は，地主的土地所有と農奴農民の労働力とにあった。そしてこの場合，農業の発展段階を規定するのは，地主ならぬ農民たちの経営水準であった。何となれば，農民たちは自分の道具で自分の土地を，また地主たちの土地をも耕していたからである。だが，そこで用いられている技術水準は，西ヨーロッパのそれと比較した場合，較べものにならぬほど立ちおくれていた。地主と国家との双方からのさまざまの義務負担に打ちひしがれていた農民層は，原始的な用具と旧態依然たる三圃制農法とによって，自分の土地や地主所領を耕作し，辛じて単純再生産を実現しているにすぎなかった。

地主たちが自己の経営を発展させるためにとった方策は，農奴農民の労働強化である。すなわち，賦役日数を増加し，農民に区劃された分与地を収用し，さらに，農民たちをメーシャチニクにすることによって，自分たちの耕地を拡大した。

社会的分業はいよいよすすみ，農民経済も地主経済もおしなべて市場との結びつきを強めてきた。この時期に，その生産物を商品として大量に市場に出していたのは，ウラルの鉱山業を除けば，軽工業，主として繊維工場の生産物と地主経営からの生産物である。商人や農民（富裕な）のもつマニュファクチャーや，クスターリ営業などは，農民経営での家庭用品などを供給し，それはそれとして一定の役割を演じていた。

国内市場が全ロシヤ的な規模で形成されはじめたのはこの時期である。対外的には，外国市場に商品を輸出するヨーロッパの主導的な国家として登場してきた。輸出商品の主なるものは，鉄，大麻，麻，植物性油，皮革等の農産物および穀物で，18世紀の中葉においてはまだ輸出商品の中で穀物がもっとも主要なものではなかった。道路や運輸の条件がひどく悪かったからである。領主たちの世襲地企業では，穀物はまた，醸造用の原料として用いられていた。

辺境の内国植民，白ロシヤをはじめとする周辺の併合は，農工業を発展させ，社会的分業と国内市場を拡大した。就中，黒海沿岸をとり入れたことは，国際貿易市場への自由な門戸を開き得たという点で重要な意義をもっていた。

このようにして，農奴制の農業国ロシヤに新たなる産業として工業及び商業が発展してくると，そこに新しい社会階層としての商工業者層が形成され，そこでは生産をめぐ

る諸関係も古いもののままではなくなってきた。

しかしそうした動きは，必ずしも早いテンポで進んだわけではない。全ロシヤを総じてみるならば，この時期に特徴的なものは「絶対王制の強化」である。その場合，エカテリーナ二世，パーベル一世，とくに前者の役割を無視してはならない。

商品，貨幣関係の強化という側面から，封建農奴主的経営を主体とする経済の中にあらわれてきた変動は，社会的イデオロギー，とくに経済観の変化によってとらえることができる。貴族層の中のもっとも活動的な企業家グループは，幾多のイデオローグを輩出した。それには評論家，経済学者ばかりでなく，工業や農業を実際に経営している人たちも含まれている。かれらの提起した問題は，工業，商業，商業的農業の発展方策についてであり，また，生産力の発展を阻止しているのは何かという問題である。これらの評論家たちは大別して二つの社会階層を代表していた。一つは農奴主貴族のイデオローグ[1]で，土地と農奴農民の労働とに対する既存の権利をさらに拡大し，そのことによって経営の収益性を高めることを主張した。他の一つは商，工業の経営家たちで，商工業活動の自由という考えをまもっていた。しかしかれらは，農奴制の撤廃を主張するまでには踏み切れず，それに一定の「賢明な」枠を設けるべきだという希望をのべたにすぎない。このようにかれらが，資本家的企業精神を徹底して主張できなかったことは，この階層の経済力が農奴主体制の中で占めていた位置を如実にあらわしていると言えよう。この階層が社会的な力として弱体であったことはもちろんであるが，経済力そのものもまだ脆弱であった。

18世紀の末になると，いわゆる革命的民主主義の嚆矢と呼ばれているア・エヌ・ラジーシチェフが出てくる。かれについての紹介は数多くあるので，つづめて言うと，かれが希んでいたのは，生産手段の所有者たる農奴主の手から解放された独立自営農民の輩出である。商，工業の自由な発展を唱え，貨幣，価格，信用等の問題についても独創的な意見を述べているが，結局，農奴制と専制政治とが，国の生産力の発展を阻害しているものであるとして，その一掃を叫ぶに到るのである。

さて，工業が発展し，都市の建設や軍事用需要が拡大したことによって，消費品としての，また原料品としての農業生産物に対する需要が増大した。つまり，農業に与えられた課題はこの増大する需要に応えることであった。

しかしながら，おくれた農業技術，原始的な生産用具，収穫率の低い穀物，体位の劣悪な家畜，無肥料，牧草も播種しないこと等が，植産，畜産の生産性の悪さを，全体として農業の立ちおくれを条件づけていた。地主経営の農業生産の実体はこのようなものであったので，当面する課題たる農業における生産の急増を完うすることができなかったのは言うまでもない。そこで農業における生産力の拡大ということが，18世紀中葉のロシヤの最大の経済的課題となった。

地主たちは，この課題に直面して，賦役強化その他の農民収奪の強化をもって対処し

1）ア・ペ・スマロコフ，エム・エム・シチェルバトフ等

たが，それだけでは到底この課題に応えることはできなかった。これら地主の中もっとも先進的な人たちは，科学的にこの課題を解決する方法を追求した。

「ロシヤ科学アカデミーに農業部門を設置する」というエカテリーナ二世の勅令（1763年9月）は，こうした要望の結実したものである。この勅令に応えて，科学アカデミーに特別委員会が設けられた。しかし，当時科学アカデミー会員であったエム・ヴェ・ロモノーソフは，同じ種類の機関が科学アカデミーの外にも設けらるべきであると主張した。ロモノーソフの考えでは，ロシヤ科学アカデミーの主導権は外国人会員の手中にあるので，科学アカデミーの場では農業問題をまっとうに解決することはできないというのである。かれは「全体の福祉」，「国家全体としての利益」という立場から，農業生産に与えられた課題にとりくむことを繰返し主張した。かれの言葉によると，「国家の福祉，栄光，輝ける状態」というのは，「何よりもまず，内部的な平安，安全および臣民たちの満足」から生まれる。したがって「国家はナロードの福祉について配慮しなければならない。」この言葉の中に，ロシヤ人としてはじめてロシヤ科学アカデミーの会員となったロモノーソフの熱烈な祖国愛が汲みとられる。かれは，1763年の末に，「（農村）経営建設（ドモストロイーテリストボ）国家協議会設立に関する意見」[1] を書いたが，この中でかれは，前述のごとく，国家にとって緊急の農業問題の考究は，アカデミーの枠の中でだけ取組むのでなくて，全国家的に取組むべきことを主張している。また，この協議会の会長，副会長には自然科学に充分明るい人を，また助言者としては，物理，化学，機械，工学，地理学，植物学，医学の専門学者と，林業家，園芸家およびとくに小作人の中の実践家を選ぶべきだとしている。さらに，協議会の活動は，国の全域に分布された通信員網と協議会の各県支部とに依拠すべきものだとした。この意見書によると，協議会の基本的な課題は，一，天候，収獲，森林，道路及び運河，農村工業に関する情報をあつめること。二，農業生産についての研究資料をあつめ，それに審議を加えて結論を導き出すこと。の二つであった。またかれは，審議会直属の農業実験センターを山間地帯，乾燥地帯，沼沢地帯，粘土質地帯，牧草地帯等というように，さまざまの地帯に設けることをかんがえていた。さらにさまざまの農業問題についての懸賞論文を募集することも，また会員の権利，義務を規定する規約をさだめることも，すでにかれの考えの中に含まれていた。言うまでもなくこのようなロモノーソフのあれこれのかんがえは，科学アカデミーや外国諸機関との緊密な連携の下で行なわれることを前提にしていた。

このような国立の機関たる協議会の設立についてのロモノーソフの計画案は，かれの存命中遂に日の眼をみることができなかった。しかし，かれの死後丁度半年たったとき，すなわち，1765年の10月に，「ロシヤにおける農業と経営建設（ドモストロイーテリストボ）を奨励するための

1）Мнение об учреждении Государственной коллегии (сельского) земского домостроительства，当時〈домостроительство〉は，農業生産，畜産，園芸，機械を用いてする仕事，経営管理等を意味していた。

この意見書はロモノーソフの死後100年を経て，1871年に Антон Будилович が「ロモノーソフの著作活動研究資料集」の「未刊著作部分」ではじめて発表した。

帝国自由経済協会」がエカテリーナ二世治下のロシヤに誕生したのである。出来上った帝国自由経済協会の計画，課題，規約をみると，バラバラの形ではあったが，ロモノーソフの考え方のくり返しであった。

帝国自由経済協会の歴史を書いた人々，ア・イ・ホドネフ，ペ・ペ・ペカルスキー，ア・エヌ・ベケートフ，エヌ・ゲ・クリャブコ・コレッキー等は，協会設立の功績を挙げてエカテリーナ二世のものとし，計画や規約を作製したのは官廷司書のイ・イ・タウベルトだと述べている。これらの筆者たちが述べているところによると，帝国自由経済協会を設立するという考えは，「開明的な女帝」がロシヤの農業に「熱心」なことの結果として出てきたのであり，この考えを実現することをロシヤ科学アカデミー会員であり，アカデミー事務局の相談役たるタウベルトに任せられたのである。

この点について，アリョーシキン氏は言葉するどく反論している。[1] アリョーシキン氏の言葉によると，エカテリーナ二世はもっともきびしい農奴主として知られており，農奴農民の収奪を強化することによって貴族階級の利益を擁護した女帝である。このような女帝が，ロシヤの農業について「配慮した」というようなことが，一体あり得ようか。ましてや，タウベルトのごときがロシヤ国民の福祉とか，ロシヤ農業について「配慮した」などということはできない。タウベルトは，ロシヤ科学アカデミーの歴史の中では，学者としてでなくて，行政家にして猟官者として知られている者ではないか，[2] としている。

ヤ・ヤ・ズウティスは，エカテリーナ二世に自由経済協会を設立しようという考えを起させたのは，技師のエイゼンであると述べている[3]。これにたいしてアリョーシキンは，エイゼンが ВЭО の会員として記録に上るのはやっと1872年，つまり設立後7年を経てからであることから，ズウティスの意見は疑問である[3] としている。

さらに ВЭО の会員ア・テ・ボロトフの，「ロモノーソフによって提起された農業問題研究機関を設置するという考えを実地に進めて実務的に協会設立の下地をつくったのは長く協会の書記たりしアンドレイ・アンドレィヴィチ・ナルトフである[5]」という意見を付け加えておこう。

ここでは ВЭО の設立を促したものは一体何であったかという問題について少し考えてみよう。一言で言えば ВЭО は，工業が発展し，市場が拡大しつつあるという条件の下で，ロシヤの先進的な貴族たちの農業への援助の要請によって発生したのである。何となれば，農奴農民の経営が崩壊し，封建領主階級の主要な社会的基盤がくずれ，その停滞になやんでいたからである。

また ВЭО の設立に大きな影響を与えたものとして，農業生産を最も重視していた重

1）Орешкин, Там же, стр. 18

2）Орешкин, Там же.

3）Я.Я. Зутис, Остзейский вопрос в XVIII веке, Рига, 1946, стр. 338, 339

4）Орешкин, Там же.

5）А.Т. Болотов, Современник или записки для потомства, ч.1, 1795, стр. 286 これは Щедрин 名称 図書館手稿部門にある。整理番号 QW, № 66

農主義者たちの所説を挙げねばならない。重農主義者たちの考え方が，ロシヤの高官たちによく通る考え方であったことは容易に肯くことができる。

さらに，BЭO の設立を促したものに，当時すでにヨーロッパ各国に同類の団体が数多く存在していて，それらの積極的な活動について外交家や旅行者たちが広く伝えてきていたことも挙げねばならない。オランダにはじまり，ヨーロッパ各国に及んだ同類の団体は，すでに述べた通り，ロシヤの BЭO が第52番目のものである。しかし，それらの中で BЭO のみが，その後150年間もの長きにわたって活動を続けてきたことは，一つには，ロシヤには他に何一つとして自主的な活動を主体とする学術団体がなかったことがその理由として考えられる。すなわち，全ロシヤに内包されていた近代科学への志向がこの BЭO に結集されたと言うべきであろう。換言すれば，BЭO はロシヤにおけるもっとも古い学術団体である。BЭO 設立の通知書の中に次のように言われている。すなわち，協会は，ロシヤ国家の「国民の間に，有益で必要な知識を広めようとする志向をもって振い立った」愛国者たちの自由意志による結合体である。協会は，政府機関のどの一つにも監督されることなく，「自由」なものであり，それはただ「女帝のみの庇護の下にあるであろう」。事実，エカテリーナ二世以後，パーベル一世を除くあらゆるツァーリは，即位の際に勅書を以って，BЭO への「庇護」に同意することを確認した。

二　内　　規

協会の活動は内規に従って進められてきた。内規の草案は特別委員会によって作製され，協会の総会が採択し，ツァーリによって認証された。内規によってきめられていたのは

協会の目的
会員の構成
管理機関
選挙手続
活動規定
委員，委員会，支部の設置
会長，書記，会計係，会員及び通信会員の権利，義務
管理機関及び協会全体としての報告の形式

である。BЭOが存続した150年間に，内規が新たに採択されたのは4回，つまり，1765年，1824年，1859年，1872年においてである。別に，部分的な改訂が行なわれたのは，1816年と1856年の2回である。

ではこの内規改訂は，一体何にもとずいて行なわれたのであるか。言うまでもなく，BЭO は常に中小の地主たる貴族層の利益擁護という線を外れることはなかった。しかし，その貴族層の支配の在り方は，国の経済の中に商品貨幣関係が発展し資本主義的な経営形態が拡大するに従って，そのかたちを変えてきていた。協会の内規改訂は，すなわちこのようなかたちの変化のあらわれである。逆に言えば，協会の内規がどのように

改訂されたかによって，貴族層の経済政策がどのように変更されたかを判断することができる。たとえば，1765年の内規は，協会が国家の中での「国民福祉の増大」[1]をうたっている。1824年の内規をみると，ВЭОの目的は「主要な三つの源泉――土地，手細工業，工業から得られる国富をつくり出す方法のあらゆる用い方に対する指針」を与えることだとしている。ВЭО の課題としてうたわれているものも，18世紀後半の1765―1800年代と，19世紀前半の1801―1825年代とでは若干の相異がみられる。1824年に採択された内規によると，「市場の需要にたいする地主経営の適応」と「農業生産の工業との結合の合目的性」とがうたわれている。また，封建地代の源泉が農業生産に従事する農奴農民の労働のみでなく，工業，営業，世襲地企業に従事する農奴農民の労働でもあることが，内規によって明記されている。ここでわれわれは，当時の農政の基調は，農奴農民の収奪の強化と封建地代の引上げとにあったことを想起しなければならない。

1824年に採択された内規は，その後の三分の一世紀，すなわち，1861年まで殆んど更訂されなかった。しかし，ここで，1824年の内規が採択されてから約30年後の«Труды»に現われた次のような言葉を引用しておきたい。すなわち，それは，「その当時(1824)からくらべると，ВЭО の業務の対象に対する見解も，ロシヤにおける生産性や産業の状態も，協会の構成メンバーも，本質的に変ってきている」[2]というのである。ここに言う「本質的」とは，地主経営が商品，貨幣経済と市場交換関係の中に引入れられ，貴族経営の現物的，閉鎖的な性格が失なわれて，封建農奴主体制の基盤がぐらついてきたことを意味する。かくて，1859年に採択された内規は，農民改革直前の革命的な情勢の中で採択されたものであった。

19世紀になると，地主経営は，亜麻，ラシヤ織，ウオトカ醸造，製糖などの諸企業に盛に手を出し，それらの工場化をはかったが，何れの場合も「農奴労働」に基盤をおいていた。農業生産原料の加工業の比重が，地主経営の中で占める割合が漸次増大してきたのである。1859年に採択された ВЭО の内規が，以前のものよりはるかに具体的，実際的なものになっているのは，このことによって説明されるであろう。すなわち，「その力相応にロシヤにおける農業と工業の発展と改善を促進する」[3]というのである。農民改革後には，ВЭО の目的と課題は，ますますブルジョア的なものとなり，それが内規にも明文化されてきた。ВЭО をとりまく企業家貴族たちは，ВЭО の目的が資本家的農業を目ざすところにあることを最早かくそうとしなかったのである。

三　構　　成

会員は正会員及び通信会員から成り，正会員に義務づけられていたのは，「農業，経営建設(ドモストロィーテリストボ)，鉱山業マニュファクチャーおよび手細工業についての最新の資料を，体験によってしらべ，また，自分の経験や外国における諸活動を出版し，それらを ВЭО

1）“Труды ВЭО”, ч. 1, 1765, стр.1

2）Труды, 1857, т.1, стр. 73, Действия общества

3）Уставы и. В Э О и высочайшие рескрипты ему данные, СПБ, 1899, стр. 83

の集会の審議に提供すること」であった。そして，ロシヤ帝国の国民ばかりでなく，外国人にも等しく BЭO の会員になる資格が与えられていた。

会員又は通信会員であったものの中から，めぼしい人の名前を拾ってみよう。

1）学　者

エム・ア・バルギィヤンスキー，ヴェ・ペ・ベゾブラゾーフ，エヌ・ア・ベゾブラゾーフ，エヌ・ア・ベケートフ，ア・エム・ブトレローフ，イ・ヴェ・ヴェルナードスキー，ベ・ベ・ヴェセロフスキー，イ・ヤ・ゴルローフ，ヴェ・ヴェ・ダクチャーエフ，ア・ヤ・ザボローツキー-ディシャトーフスキー，イエ・ペ・コバレーフスキー，エム・エム・コバレーフスキー，ペ・ア・コストィチェフ，ペ・イ・リャーシチェンコ，デ・イ・メンデレーエフ，エヌ・エス・モルドヴィノフ，カ・ア・パジートノフ，ヴェ・エス・ポロシン，デ・エヌ・スカールジン，エム・エム・スペランスキー，ペ・ベ・ストルーベ,イェ・ヴェ・タルレ，エリ・ヴェ・テンゴボルスキー，エム・イ・トゥガン-バラノーフスキー，ア・エヌ・エンゲリガルト

2）ロシヤ科学アカデミー会員

クリングシュテット，ラクスマン，エル・オィラー，イ・グメリン

3）航海者

イ・エフ・クルーゼルシュタイン，フィヨードル・リトケ

4）軍事家及び政治家

エム・イ・クトウゾフ-ゴレニシチェフ，ア・エヌ・セニャヴィン将軍

5）旅行家

ペ・ペ・セミョーノフ-チャンシャンスキー，ミクルーホ-マクライ

6）作家，批評家

ゲ・エル・ヂェルジャーヴィン，エリ・エヌ・トルストイ,オリガ・フォルシ,ヴェ・ヴェ・スターソフ，カ・カ・アルセニエフ

なお，外国人会員の中に，アーサー・ヤング（英），ルイ・パストゥール（仏）の名前を見出すことができる。

会長は秘密投票で選挙され，1845年以後になると，副会長と会計も選挙によって決められた。

BЭO 設立の初期には，協会の中にはっきりした部門分けはなかった。主として討議の題材となったのは，農業，マニュファクチュア，一般経済問題，保健等の問題であり，それぞれの問題毎に委員会（カミテート）を設け，またそれぞれの課題毎に委員会（カミッシヤ）とその解決のための特別部門とを設けていた。ところが，1824年の内規によってはじめて，BЭO の協議会と五つの部門とがつくられた。五部門とは，

総　務　部　門

学 術 隊 部 門

農村の経営建設及び実験農業部門

あらゆる種類の手細工業と商業を扱う部門

人畜の保健部門

である。ところがこれらの各部門は，1872年に，三部門に総括された。すなわち，

農業部門
工芸農産部門
農業統計及び経済部門
である。そしてこの三部門は，ВЭО の歴史を終るまで存続した。

四　会務，活動の足跡

1．農民改革まで

(1) 総　説

創立以来，協会の運営，指導に関しては，殆んどの責任と権限とを会長が掌握していた。ところが 1859年になってはじめて，協議会が設置され，これが会務の運営，指導にあたることになった。

ВЭО の活動の範囲と方法とは，それぞれ 1770，1824，1859，1872年の内規において付則によって規定されている。それは

1）雑誌を定期に刊行し，農耕，営農，経営建設（ドモストロイーテリストボ）の先進的な方法を普及すること。

2）改良農業機械の雛型を蒐集し，それを農村の経営主たちに宣伝すること。

3）農業および手細工の学校を開設すること。

4）地主および大小の工場主たちを援助するために，化学者，機械工学者，植物学者鉱物学者たちの発明，発見を利用すること。

5）農業博覧会及び産業博覧会を開催すること。

6）農業および工業生産に関する諸問題，社会，経済的諸問題等を課題として懸賞論文の募集をすること。

7）懸賞募集して集ったすぐれた論文に対して，現金や金，銀のメダルを授賞すること。

等である。

次に ВЭО の活動の枠について考えてみよう。このことは ВЭО が常に貴族地主層のイデオローグであったといえば，略々充分であるかも知れない。ВЭО 協議会の報告の中に次のような言葉がある。

「ВЭО から出されるあらゆる出版物は，次の二つの条件を充たすものでなければならない。

1）著作物の中に述べられる方法手段は，積極的な発言であり，うまく実用に供されるようなものであること。

2）著作に述べられる考え方は，国家の政治状勢に対してあいまいな態度をもったものではならないこと」[1)]

ВЭО の協議会がきわめて神経質に追跡したのは，取扱うべき経済問題の解決策の中には，封建農奴主体制に対する如何なる反対論も含まれないようにということであった。ВЭО の課題として挙げられたものを見ると，

1）Журнал заседания Совета ВЭО 24 янв. 1840

それらの課題そのものが，具体的に農業と直接に結びついていた。何となれば，一般に領地を所有する貴族地主たちは，直接間接に農業生産に従事していたからである。

18世紀の後半から19世紀に入ると，農業生産はいよいよ多面的なものとなってきた。穀物，工芸作物の栽培のみでなく，畜産や農産原料加工の企業（ウオトカ醸造，製糖，ラシヤ，石鹸製造等）を所領の中につくることなどである。貴族層の中のもっとも事業慾に富んだグループは，国内市場の，また時としては外国市場の需要に応ずるような多面的な経営を推進するよう努めていた。

BЭO がとりあげた，あるいは，とりあげざるを得なかった問題として，さらに，中小地主の経営問題がある。このばあい，経営問題とは，社会的にはげしい動きをもつ諸問題であり，社会問題とも言うべき問題であった。その中注目すべきは，土地所有権と農奴制の諸関係との問題，賦役か小作かという問題，自由雇傭労働に関する問題，農業生産が如何にして工業生産と結びつくかという問題，国内及び国外商業と商業政策の問題，財政及び課税政策，土地の社会的所有及び個人的所有についての問題，労働問題等である。

(2) 輪　　作

これらの問題のうちで，BЭO にとって第一の比重をもっていたのは，農業そのものについての問題である。封建時代のロシヤ農業を特徴づけるのは，農業の постропольеと三圃制とである。地主経営といわず，農民経営といわず，農耕方法が技術的に立ちおくれ，生産性の低いことは，その収穫率の低さを条件づけていた。そこで BЭO の農業専門家や学者たちは，新しい農法として輪作制又は多圃制をとりあげた。すなわち，ロシヤの農業問題を技術的な面で集約し，それを輪作の問題にしぼったのである。そして，かれら自身の経営での経験とBЭOに直属する実験圃場の資料とを分析し，地主経営にしろ，農民経営にしろ，輪作制乃至多圃制に移行するようにと説得する活動を続けた。このような活動の中で主導的な位置にいたのは，ア・テ・ボロトフ，ペ・イ・ルィチコフ，ヴェ・イ・レフシン，デ・ペ・シェレホフ，エヌ・エス・モルドヴィノフ等である。

1827年1月22日付の年次報告の中に，次のような記事がある。「ドミトリー・ポタノヴィチ・シェレホフ大佐は，ロシヤのほとんど全域で行われている三圃式耕作方法の国民的福祉にとっての大きな害について演説し，また，農民も地主も，ひとしく，輪作農法をとり入れることが国民的福祉にとって如何に利益になり，有意義であるかについて演説している。」また翌28年には，BЭO のイニシァティヴにより，「ロシヤに輪作農業を定置，確立するためのサンクト・ペテルブルグ農事会社」が創設された。

1837年に，当時 BЭO の会長であったエヌ・エス・モルドヴィノフは，「三圃式農法の不利なことと，輪作農法の有益で不可避なことについて」書いているが，その中に次のような言葉がある。「ロシヤにおいては，三圃式農法をどうしてもなくしてしまわねばならぬ――。輪作による農耕方式こそ，農業発展の主要な，かつ，基本的な方法として，ロシヤに根を下ろさせねばならない。」しかし，もちろん，モルドヴィノフのこの

言葉は，農業発展のために輪作農法がもっている意義を過大評価していると言わざるを得ない。何となれば，かれは，農業の低位生産性の主要な原因である農奴制的な諸関係について何一つふれていないからである。しかしながら，この時期において，ВЭО の会長の位置にあったかれが，声を大にして輪作農法の普及につとめたことは，少なからざる影響をもっていた。

(3) 品種改良

ВЭО はまた，作物の品種改良にも大きな注意を払っていた。品質のよい穀物を導入し，普及させるために，ВЭО 附属の種子販売所を設営し，そこでライ麦，燕麦，小麦大麦の種子を安価に供給した。また，馬鈴薯の栽培をロシヤに普及するため，種子薯の斡旋に当っていた。18世紀の前半には，ロシヤにおいて馬鈴薯が栽培されたという例は殆んど稀にしか記録されていない。殆んどの農民は，馬鈴薯についてまったく知らなかった。1767年の "Труды" に，ペレスラヴ県の一地主の言葉として次のような記事がある。「この地方の住民たちは，地中林檎（ゼムリヤーノイエ　ヤーブラコ　カルトーフェリ馬鈴薯の旧称）のことを，その作りかたを教えられるまでまったく知らなかった。ここでは，以前になかったようなものを生育したことは，一度もない。」[1] ВЭО とならんで，馬鈴薯の普及に当ったものに，ノヴゴロドの県知事シベルスの名を挙げることができる。かれは，1766年に送られてきた馬鈴薯の種子を播種するようにとの指示を出した。ВЭО は，この馬鈴薯をどのようにして播種し，収穫，貯蔵し，使用するかを印刷物にして盛んに流していた。

(4) 工芸作物

また，ВЭО は工芸作物の普及についても大きな注意を払っていた。たとえば，甜菜，中国あさ，亜麻，たばこ等である。さらに，稀少性のある作物，たとえば，とうもろこし，米，棉花，こしょう，ポップ，ごま，ぶどう，からし，染色用植物（いらくさ，西洋あかね，インド藍など）にも関心を寄せ，その栽培を奨励していた。

(5) 植林，養蜂等

さらにまた，ВЭО は，植林，園芸，菜園，養蜂にも大きな注意をむけていた。これらのうち，養蜂についての ВЭО の指導は，ロシヤの農家経営において占める養蜂の比重の大きさから言って，とくに注目しなければならない。改革前の時期においてこの養蜂に大きな関心を寄せて指導したのは，化学者のア・エム・ブトレロフであった。

各所領に植林するための樹木やその苗木を，ВЭО の経費で発註，分配していたが，それらは，かし，かえで，ぶな，ねず等の比較的高価なものであった。また，果樹やいちごの木や種子の普及にもつとめていた。

ВЭО は，地主経営にしろ農民経営にしろ，もっとも収穫率の高い穀物，とくに工芸作物や果樹及び林用樹を成功的にとり入れたものにたいして，金製，銀製のメダルや現金による褒賞をした。もちろん，これら一連の農業改良についての努力の主要なモチーフとなったのは，地主所領の収入の増大を目的とし，また一方では，農奴農民の労働生産性を高めようとすることにあった。

---

1) "Труды ВЭО", 1767, ч.8, стр. 61 以下

(6) 畜　　産

農業経営の収支計算をした場合，植産につぐ大きな収入費目が畜産であったことは言うまでもない。したがって，ВЭО もまた畜産の振興に大きな関心を寄せていた。家畜の品種改良，飼育，治療に関して，多数のパンフレット等の出版物を出し，また，もっとも経験豊富な畜産の実際家や学者たちによる公開講演会を催した。注目されていたのは，肉乳畜，細毛羊，馬産および乳産物加工（バター，チーズの製造）である。19世紀の40年代の終りに，また，1868年に，ペトログラードにおいて，肉畜及び乳畜の全露博覧会が開催された。

ВЭО は，ロシヤにおいてのちになって大いに普及したチーズ製造の創始者である。60年代に，エヌ・ヴェ・ヴェルシチャーギンをスイスに出張させて，チーズの製造について研究させた。かれが帰国するや，ВЭО は1万ルーブリを支出して，多数のチーズ製造アルテリをつくるよう依嘱した。すでに70年代の終りには，ロシヤにおけるチーズ製造は，国外に輸出するまでに伸びていた。

(7) 農業機械，器具

農業機械の製造と経営への導入について，ВЭО はどのように考えていたか。ВЭО の会員の考え方を代弁して，1865年に書記をしていたホドネフは次のように書いている。すなわち，「国民の文明化の段階は，ひろく一般に用いられている農具の質によって測られる」[1] と。ВЭО に附属して，農業機械のモデルを展示した博物館が設けられた。ВЭО は，しばしば農具博覧会や農具実演会を開催した。新しい農業機械の紹介，解説をするために，おびただしい数の印刷物を出し，“Труды” もそのために多くの頁数を割いている。

1824年に，協会は独自の農業機械製作所をつくり，それは1844年まで20年間存続した。ここでつくったのは，プラウ，まぐわ，播種機，風撰器，精選機，耕耘機，大鎌，鎌，馬用レーキ，種子撹拌器，刈取機，脱穀機である。ここでの実験成績は，広くロシヤ国内に知れわたり，数多くの問合せが殺到した。1773年に機械工のサモイロフが排水機を考案し，その設計図を送ってきたときに，ВЭО は会員であり，著名な物理学者であるオイラーにその検討をさせている。同じく1773年には，農民イワン・モチキンからも脱穀機の図面が送られてきた。1829年にはベレッキー・ノセンコの蒸気プラウが出たし，1855年にВЭОにおいて報告した機械工ゲ・ア・チャプルィギンの発明は，32の多きを数える。ВЭО はまた，各種機械，器具の検査にも当っていたが，その中には水力圧搾機，搾油機（攪乳器），杵打機，製粉用機械，装置等があった。

穀倉，納屋，家畜用諸施設，畜舎，農民の住居，簡素な暖房用暖炉，運搬用の車道の状況等についても，“Труды” の紙面を割いて組織的な発表を行ってきた。

61年の改革以後，地主階級の一部と富農層とは，広汎に農耕労働用具を用いはじめた。ВЭО は，農業生産用具の実験を主要な任務とする特別委員会を設けた。

1865年と1871年に，ペトログラード，スモレンスク，その他の諸都市において農業機

1）А.И.Ходнев, История имп. ВЭО, СПб, 1865. стр. 231

械博覧会が行われた。すぐれた機械の雛型を実地に試用するために，ВЭО は，その購入のための特別資金を個々の地主たちに与え，使用の指針書を配布した。また，ВЭО は，大小個々の地主経営や農民経営に農業機械，器具を普及させるために，クスターリ営業がすき，播種機，風撰器，馬用レーキ，脱穀機等をつくるのを大いに援助した。

(8) 実験圃場

ВЭО は，印刷物による宣伝啓蒙だけで満足していたわけでなく，独自の実験農場をもっていたし，種々の作物の成育状態を観察するために，時として会員の私有地をも利用していた。ВЭО 直属の実験農場では，長期に渉る各種作物の観察を行い，その結果を公表してきた。各種肥料（石膏，硫酸，石灰を含む）の諸作物にたいする肥効を調べていた。作られたものの中には，89種類の馬鈴薯，各種のタバコ，とうもろこしなどがあった。

(9) 博 覧 会

ВЭО によってたびたび農業博覧会が開催されたが，その目的は，「地主，事業家および農民が，経営管理，農具製作，肉畜及び乳畜飼育のすぐれた経験を見倣うようにする」ことにあった。1850年に行われた農業博覧会は，ロシヤで最初の，かつ，きわめて大規模のものであった。この博覧会には，ヨーロッパ・ロシヤの全県とシベリヤ，カフカーズ地方およびフィンランドからの参加があった。ペ・エム・プレオブラジェンスキーの記述[1] によると，この博覧会には 3,500 以上の出品物があった。すなわち，

穀物其他澱粉質植物	86
根 菜 類	49
繊維質，染料用植物	340
木 材 類	66
果実，苺類	45
蔬 菜 類	75
家畜各種	48
土壌，鉱物，粘土，塩，石灰等	330
農工産物	1,430
農業機械，器具	190
改良農具雛型	114

等である。この時の博覧会についてプレオブラジェンスキーは，「この博覧会がわれわれに示したのは，この20年間にロシヤの農村工業が相当急速に発展したことと，わが国では以前は知られていなかったような一連の農村営業（セリスコエ プロムイセル）が発達し，また，いちぢるしく改良され，たいへんな規模に達したことである」[2] と述べている。第二回目の農業博覧会は1860年に開催され，出品物の数は 3,700 以上にのぼった。

(10) 他 産 業

以上主として農業における ВЭО の技術的指導について述べたが，ВЭО の注意はま

1）“Труды”, 1851, т.1, стр. 123 以下
2）Там же

た，採掘産業についてもむけられていた。すなわち，石炭，泥炭，鉄鉱，明バン鉱等の採掘である。その他，ソーダ，化学肥料，染料等，これらは概して国民経済的な意味で大きな比重をもっていた産業である。18世紀の末から19世紀の前半にかけて，ВЭО は有用鉱物採掘に関する懸賞論文を募集した。しかし，豊富な天然資源と ВЭО による調査成果とにもかかわらず，実際にはそれ程の成果を挙げられなかった。その因は，要するに，封建ロシヤにおける技術的な立ちおくれである。

(11) 保　　健

ВЭО の活動は，上述のごとき産業指導にとどまらず，きわめて多面的なものであった。その中とくに注目すべきは，種痘に関するものである。天然痘による死亡者の数は毎年数万人の多きを数えていたが，ツァーリ政府の行政指導は，状態を改善するために殆んど何の影響力も持たなかった。ВЭО は，県の種痘特別委員会設置と種痘接種のための助医を大量に養成することにおいて，主導的な活動をすすめてきた。種痘の接種を組織的，成功的に行った人やすぐれた助医たちにたいしては，政府の名によって，また ВЭО の名によって数々の褒賞を行った。小児を対象とする種痘の接種は，1824年から1845年までの約20年間に，4，100万人を数えている。ВЭО は，種痘をはじめとする国民保健一般について多くの出版物を出し，国内外の学者たちの医療業績を紹介し，また，家畜の病気やその治療方法なども紹介した。

(12) 出　　版

ВЭО によって出された定期刊行物その他の出版活動について述べる場合，先づ挙げなければならないのは，「自由経済協会報告（Труды ВЭО）」である。“Труды” は150年間にわたって組織的に出版され，常に協会活動の槓杆となってきた。これが発行されなかったのは，1776—78年，1821—31年，1834年，1836—41年および1901年だけである。1765年から1915年まで，150年間に全部で281冊出ている。この間，1821年から1841年まで（但し，1833年と1835年を除く）は，“Труды” に代って別の冊子を出していた。

“Труды” 以外に出した雑誌は次の通りである。

“Экономические известия” 1788-1789

“Круг хозяйственных сведений” 1805

“Атлас музеум ИВЭО ”1841

“Лесной журнал” 1845

“Экономические записки” 不詳

などである。

(13) 教育啓蒙活動

ВЭО はまた，多くの学校をつくった。それらの中には協会の資金によるものもありまた，会員の私的な資金によるものもあった。たとえば，ストロガーノフ伯爵夫人による「農耕と手工の実践学校」（1825～1844）などである。これらの学校において，若い農奴たちに農業，鉱山の採掘技術，手工業等の教育が施された。1849年に ВЭО がペテルブルグにつくった農業学校は，オフテンスク農場の中に実験圃場をもっていた。ВЭО

の奨学生は，経験豊かな地主の私経営など（チェルニゴフ県のカンヂーブ，タヴダリー県のデ・ペ・シェレホフ，ハリコフ県の教習農場等）に派遣され，また，森林測量専門学校，ゴルィゴーレツ専門学校や外国にも派遣されていた。これらの学校開設や奨学生によって BЭO が意図したのは，「輪作農業をおこない，畜産部門を強化し，人造肥料を使用し，交通路を改善し……さらに，農業科学の実践的，ならびに理論的研究」をすすめることであった。

BЭO による公開講演も非常な評判を呼んだ。1860 年の BЭO 協議会大会誌に次のような記述がある。すわち，「従来のとおり，物理学，化学，林学についての講義が，無料で行われた。出席者の数は，BЭO のホールが時としてそれを収容しきれないほどに多かった。」[1] 講義を担当したのは，著名な学者や実践家たちである。すなわち，農学は教授エス・エム・ウーソフ，ア・ヴェ・ソヴェートフ，経済学については教授イ・ヴェ・ヴェルナドスキー，イ・ア・ゴルロフなどである。

(14) 経済調査

ロシヤ各地の経済状態について，BЭO は大きな注意を払っていた。農業生産の自然地理的および経済的な諸条件を具体的に知らなければ，協会として個々の地方の農業を援助するに当つて充分な根拠をもつて審議できないというのが，BЭO の会員たちに共通した認識であつた。とくに18世紀のロシヤにおいては，個々の地方の経済状態については具体的な資料に乏しく，極めて不完全な知識しかもつていなかつた。領域の広さ，住民の数が明らかにされておらず，気候，土壌，植物および動物，有用埋蔵物，県の経済的な特性等々について，ほとんど何も知られていなかつた。BЭO は，1765年創立の年に，ロシヤ各地の経済資料を集める最初の試みを行つたが，その方法は65問から成るアンケートによるものであつた。[2] このアンケートは，ロシヤ全域の県知事，大きな所領の経営に当つている経営管理人および各個々人に送られた。アンケートの内容は，耕作地（その分類と地質構成），播種作物の種類，耕作方法，輪作，農具，土地資源，森林，河川，魚撈等にわたつていた。これらの項目によつて，その地方の経済的潜在力を知ることができた。もう一つの問題群は収穫率，収益性，取引関係，商品価格，輸送方法，交通路，習俗，住宅用及び営業用建物，住民の主要な生業等に関するものであった。さらに又，住民の社会的状態についての問題もあった。たとえば，賦役の量，農民たちの暮し向き，農民の貧困の原因，というような問題である。

しかし，BЭO の通信員の中で，このアンケートに回答を寄せたものは極くわずかしかなかった。これは，ロシヤ貴族のかたさ，保守主義，他の県に比較して自分の県が劣勢であるのを明らかにすることへのおそれ等がその所因である。ともあれ，よせられた回答は，18世紀の末の30年間のロシヤの経済状態を知るために，きわめて重要な資料となっている。[3]

1765年のアンケートばかりでなく，1784年，1785年，1786—88年に行われたアンケー

1）Ходнев, Там же, стр. 278
2）"Труды", 1765, стр. 180
3）この回答は "Труды" № 2，3，7，8，10～13，23，26（1786～88）に印刷されている。

トへの回答も，BЭO を満足させることはできなかった。そこで1790年に，ロシヤ各県の私有地の経営について書いた人を褒賞すると発表した。そのテーマは次のようなものであった。

1．その地域について（乾燥，水，気候）
2．その地方の埋蔵物及び自然資源と経営の中での，また工業用としての有効な用い方
3．経済的な研究対象
4．都市住民及びその営業の経済的習慣，都市営業の種類，生産対象
5．農村住民とその習俗，すなわち，農村営業や労働用具について
6．商業の状態，商品の種類（各季の価格を附す）移出入商品一覧

1790年のこの試みは，問題の立て方が組織的，体系的になった点で，それ以前に行われたアンケートに数等まさっていた。しかし，このときにも広くロシヤ貴族層の同調をよぶことはできなかった。寄せられた回答の中で，多少とも研究資料として役立つことができるのはルーニン中尉からの回答である。

1801年にも再びアンケート調査を行ったが，これには1813年までに12回答が寄せられた。それらは，ヤロスラヴ，モスクワ，アストラハン，ヴォルィニ，ペルム，トウーライルクーツクの諸県とカフカースについて書いたものであった。その中，興味あるのはBЭO の会員で県測量士のローセフがイルクーツク県について書いたものである。

1829年に BЭO は，「ロシヤ農業カレンダー，実際的農業指針」を出版するための資料を集めはじめた。1830年から10年間，多数の会員がロシヤ各地で資料の募集に当った。BЭO はまた，国内外の穀物価格に関する資料を定期的にあつめる仕事もつづけていた。穀価の問題は，とくに主穀地帯たるザボールジェと南部諸県の地主階級にとって重要な問題であった。19世紀の40年代は，賦役制の危機であり，ロシヤの地主経営のもつ現物的な性格が次々と失われ，積極的に商業，市場関係に入っていった時期である。この傾向は，イギリスにおける穀物条令廃止によって，ますます拍車をかけられた。BЭO の第三部に穀価問題特別委員会が設けられ，この委員会の指導の下で，1847年にロシヤにおける穀価の平均価格に関する資料が出版された。

1849年，カルパチヤ山脈からウラル山脈にいたる広範囲の黒土帯の研究がはじめられた。BЭO は，ペテルブルグ大学の若い研究者セミョーノフとダニレフスキーをこの調査に派遣した。しかし，1850年にダニレフスキーが突然政府から招喚され，この調査は中断された。

(15) 統　　計

1845年から1852年まで，BЭO は，政府の農業統計業務に参加してきた。この仕事は「ロシヤ経済統計資料」として，1853年に BЭO の資金で第1巻が出版された。その指導に当ったのは，会員で統計学教授のイ・ヤ・ゴルロフである。

1861年，国有財産省の提案により，BЭO の会員及び通信会員の手で，ロシヤ各地方の農業経営において実際に必要なものについての資料を集めた。

2. 農民改革以後

(1)

1861年の農民改革以後，ВЭО の活動の方向にも以前とは若干異るところが出てきた。すなわち，貴族とブルジョアジーの企業家たちの利益に応えることが，一つの大きな課題となってきたのである。

改革後多くの地主たちは，自分の経営を賦役から雇傭労働に切り換えることの困難さをおそれて，なす術を知らない状態に陥っていた。そこで ВЭО は，地主たちが資本主義的な発展の道に経営を切りかえていくのに協力することを以て自己の課題としたのである。1859年，農奴主経営体制の危機に，ВЭО 第三部に政治経済委員会がつくられた。しかし，この委員会が活動を開始したのは改革の終って後のことである。この委員会の設立者であり，積極的な活動家の中に名を連ねているのは，経済学者イ・ヴェ・ヴェルナドスキー，イ・ヤ・ゴルロフ，ヴェ・ペ・ベゾブラーゾフ，ヴェ・イ・ヴェシニヤコフ，公爵ヴェ・イ・ワシリチコフなど37名である。委員会の関心は，「財政，経済関係の問題にむけられていたが，それらの問題は純粋に学問的なものよりも，現実的な意味のある問題であった」[1] これらの問題の中の第一群は，生産の三要素――土地，資本，労働の役割と意義の理論的研究を主張するものであった。第2群の問題は，地主経営の合理的な遂行方法に関するもの，すなわち，生産組織，労働力利用，地代徴収の形態等である。第3群は，商取引に関するものである。貿易政策，関税，税，市場，農業，穀物倉庫，交通路と交通手段等である。第4は，ツァーリ政府の財政政策とその農業への影響についての問題群であった。すなわち，貨幣流通，信用機関，信用形態，租税の種類等である。

政治経済委員会は1872年まで存続し，その後新しい内規によって，農業統計と政治経済の問題を取扱う ВЭО 第三部にその機能が移管された。丁度10年間に渉って存続したこの委員会は，政治経済的な分野における ВЭО の活動に一つの基礎を与えた。会で提議された問題の中には，ロシヤ国民の間に政治経済の基本的な事実を知らせることや国民経済の基礎的な知識を教える婦人学校を含む教育機関の問題などがあった。

この時期から，機関紙 “Труды” の紙上に体系的に掲載された記事の中には，新しい諸条件の下での「利潤のあがる」経営方法，もっとも生産的な雇傭労働の利用，全収支の正確な計算，多圃制輪作による集約的，多角的な経営組織等の問題があった。

しかしながら，農奴制の撤廃後も，古くからの農奴主的な立場を保持しょうとする志向は地主たちの間に依然として強く残っていて，ВЭО の内部においても，農奴主地主的な行き方と自由主義的，企業家的な行き方とが活潑な論議をたたかわせていた。1861年の改革は地主経営を破壊することなく，雇傭労働者の労働を利用することが農業の生産性を高め，地主所領の生産物の商品化率を高めると考えていたのは，地主貴族層の中のブルジョア化した部分にすぎなかった。

---

1) “Труды” 1862, т.2, 巻頭言

雇傭労働に基いて経営を組織するには，農業機械，諸道具一式，輸送，役畜，種子，肥料等に資本をかけることが必要であった。ところが大多数の地主たちは，そのための充分な資金を持合せていなかった。その故もあって，かれらは農奴制の遺制をまもることを頑強に固守していた。ВЭО の提唱する刈分け方式を採ることは，農民の農具，牽引力および労働力で以て地主の土地を耕すことができるときにのみ可能であった。或地主は次のように書くのに匿名を用いている。「土地を刈分けに出すことは今や成立する。われわれの経営にとって，農業を継続し，ロシヤの穀作者たちの先頭にいるためのこれが唯一の有利な方法である。」[1] これにたいして編集部は補註をして，刈分けは「一時的なもの」であり，「純然たる賃貸し，あるいは農場経営，ましてや個人的に経営するのは，現在でさえもっと利潤のあがるものであるべきだ」[2] と述べている。

(2)

1865年，ВЭО 創立100周年を祝って行われた村の旦那衆の第一回大会では次のような提案が行われた。つまり，貴族企業家たちの経営と直接関係ある問題をプログラムの中に入れるということである。そこで地主たちがとりあげた問題は，次のようなものであった。工業とクスターリ営業との農業生産にたいする関係，賦役によって土地利用を続けることの合目的性，農業金融機関の設立，土地改良等である。また，ロシヤ全域の経済状態を広く利用するべきであるという新たな提案が行われ，ВЭО はロシヤ地理学協会と協力すべきであるとされた。

その結果，ВЭО はロシヤ地理学協会と一緒になって，1867—68年にロシヤの穀物地帯を研究する調査隊を8つ組織し，調査結果を公刊した。[3] この報告書の中から目ぼしい筆者を拾うならば，何れも当時の著名な経済学者で，イ・エフ・バルコフスキー，ペ・チュビンスキー，アカデミー会員ヴェ・ペ・ベゾブラーゾフ，統計学教授ユ・エ・ヤンソン，エム・ラエフスキー，ヴェ・イ・チャスラフスキー等である。この報告書に述べられているのは，穀物生産，収穫率，市場価格の変動，運輸の状態，港，淀泊所，倉庫業，穀物積荷の動きの主要な方向等であり，筆者たちは，穀物取引の組織改善，鉄道建設等について自分の意見を出している。

(3)

80年代に小麦の国際価格が大暴落し，地主たちの輸出貿易が危機にひんしたとき，地主経営を支える方策として ВЭО は，穀物積荷の移送に対する課税の軽減を政府に要望した。このことを最も強く主張したのは，ペ・エリ・コルフ男爵とア・エス・エルモロフである。

80年代の終りに，今度は政府の方から ВЭО に対して関税政策に対する意見を求めたが，ВЭО は農村の経営者たちの利益を擁護する立場を堅持して，関税の大削減に賛成するという意見を述べた。すなわち，ロシヤの穀物生産が国際市場での競争に勝つためには，そうする以外にないと主張したのである。

---

1), 2) "Труды" 1863, т.1, стр. 3～5

3) "Труды экспедиции, снаряженной Императорским Вольным экономическим и Русским географическим обществом для исследования хлебной торговли и производительности России" в 4 томах, 1868–77

(4)

1876年，BЭO はゼムストヴォの活動を研究しはじめた。1864年に行われたゼムストヴォ改革は，自由主義的な地主層とブルジョアジーへの専制政府の部分的な譲歩であった。ゼムストヴォの創設は，ロシヤにおいて発展しつつあった資本主義の諸条件の下で専制機構を強化するという方向での方策であったと見るべきであろう。ゼムストヴォがやっていたのは，郡，県における農村文化方策，農業センターをつくること，クスターリ営業への協力，定期市，道路建設，さらに，国民教育，国民保健の指導等である。BЭO は，その定義を認めつつも，ゼムストヴォの行ったこれらの仕事がその場限りのものに終っていることに注目した。書記のベケートフによると，それは「力と時間と金のむだ使い」であった。しかし，BЭO はゼムストヴォ創立後の10年間はその活動を宣伝し，「ゼムストヴォ年報」6冊を出した。

(5)

1873～75年に，アカデミー会員のベゾブラーゾフによって農業統計をとることが提案された。改革後に，新しい経営方式をとり得ない地主たちによる土地の売却がはじまっていた。そこで BЭO は,アンケートによって次のような問題にとりくんだ。すなわち，郡，県毎の土地所有単位の数，それらの土地の広さ，土地の所有，所有および利用の形態，売却地及び貸地の価格，耕作人の義務負担，土地所有者の負債についてである。このアンケート調査は興味あるものになる筈だったが，以前と同じくゼムストヴォや県機関の無能なことから BЭO として所期のものは得られなかった。

(6)

経済的な問題ととりくむばかりでなく，BЭO は以前と同じく，文盲啓発の活動を設けてきた。1861年には BЭO 第三部に文盲啓発委員会ができた。この委員会がとりあげたのは，大衆の間に教育を普及すること，農業及び技術学校をつくること，その教科プログラムをつくること，啓蒙的な教科参考書の編纂と出版，国民図書館をつくることである。この委員会は35年続いたが，その間に国民教育に関する著作120種類，200万部を出した。活動家の中には，ヴェ・ヴェ・スターソフ，イ・ヴェ・ヴェルナドスキーの外，旅行家のペ・ペ・セミョーノフ，作家のヴェ・ゲ・コロレンコの名前も見られる。この委員会の活動が活発化するとともに，内務省の不満を買って，1896年に解散した。これ以後，ツアーリ政府は BЭO に対して攻勢をとるようになってきたのである。

(7)

BЭO の行ったロシヤの自然にたいする研究と調査は，とくに注目に価する。まづ60年代には，大規模な土壌調査と禾穀類にたいする肥料の影響についての研究がはじめられた。この研究の基礎をきずいたのは著名な化学者デ・イ・メンデレーエフである。かれは，1865年にこの調査の結果を BЭO で報告した。ひきつづき1869年まで，多くの県で一連の実験を行ったが，シンビルスク県の実験圃場ではカ・ア・チミリヤーゼフが指導に当っていた。この研究の結果は，「燕麦，ライ麦の収穫に与える肥料の影響をみるためのシンビルスク，スモレンスク，ペテルブルグ諸県で行われた実験報告」と題して BЭO から出版された。70年代の終りにかけて，メンデレーエフによってはじめられた

仕事を受けついで続けたのは，土壌学の始祖と言われるヴェ・ヴェ・ダクチャーエフである。かれはВЭОの依託をうけ，その資金により，1878年から79年にかけて，黒土研究のための二つの調査隊を組織した。この調査隊には，メンデレーエフをはじめ，ア・エム・ブトレロフ，ア・ア・イノストランツェフ，ペ・ア・コストィチェフも参加した。この調査結果は，「ロシヤの黒土」と題して，1883年に出版されたが，これはロシヤの黒土帯土壌に関する最初の学問的著作である。

1888年には，ВЭОに土壌関係の特別委員会を設け，パリーとシカゴの世界博覧会への出品物の作成にあたった。1899年この委員会の指導の下に雑誌「土壌学」が発行され，さらに1901年から5年間「土壌博物館」が開設されていた。

ВЭОの事業プログラムの中には，「外国経済事情の蒐集」という一項が加えられ，外国の出版物の翻訳，外国人会員，通信員，外国の学者，団体，外国に出張した会員，領事，大使等から送られてきた資料が“Труды”その他の協会出版物に印刷紹介された。とくにВЭОと密接な連携を保っていたのはドイツの経済諸団体であり，また，パリーの農業協会，フィラデルフィア農業協会，ミラノ経済協会等である。

(8)

ВЭОの会員構成にも，改革後のロシヤの状態の変化に応じて若干の変化がある。すなわちВЭОの積極的な活動家の中に，貴族以外のラズノチンツィ，商人層，事業家，小ブルジョアジーの顔が目立つようになってきた。これらの人々は，はげしい社会的な問題を協会の審議にもちこんだ。

改革後のロシヤにおける経済思想にさまざまの流派ができてきたことは，国の経済的発展の問題に関連して，諸階級の利益が相対立していたことのあらわれである。ВЭОにもさまざまの階級の代表者が入っていたので，80年代から90年代にかけて，ロシヤ資本主義化の問題について，貴族的，小ブル的およびブルジョア的経済思想の代表者たちの間で，活潑な論議がかわされた。とくに1895年のВЭО第三部を場とするナロードニキ主義と合法マルクス主義との間の論戦は，ロシヤの経済思想史をたどる場合に，一つの大きな焦点となるであろう。[1] ここでは，しかし，ВЭОがそのような場になったという事実をあげて，ВЭОの此の時期のすがたを述べるにとどめよう。ともあれ，ВЭОの中での論議は，結局のところ小ブル的なものに終っていたが，それでもツアーリ政府のВЭОにたいする心証は著しく悪化した。ВЭОの活動についての1898年4月20日付の念書の中で，内相ゴレムィキンと国有財産相エルモロフは次のように述べている。「協会は政治的な斗争の場となっており，多数の報告者たちが，公然と政府に反対する流派に属している」。そしてかれらは，ВЭОの内規変更を要求したのである。翌1899年に，ツアーリの勅命によって1872年以来の内規に検討が加えられ，ВЭОの活動は農業生産の技術的な問題の枠内に限定されることになった。その上ツアーリ政府は，ВЭОの個々の活動に圧迫を加え，協会の会議に自由に出入することを禁止し，学問的な報告

1）この点を含めて，田中真晴氏による精力的な研究がすすめられている。同氏の「1890年代ロシヤの経済思想の動向」〈経済論叢〉№94，No.2，1964他参照。

のプログラムさえも統制し，農業及国有財産相ア・エス・エルモロフの監視の下におかれた。これによって,創立以来堅持してきた如何なる国家機関にも属さないというBЭOの憲章はもろくもくずれ去ったのである。

協会の新しい内規を作成する仕事は，二つの委員会がこれに当った。その一つは，国会法律部会の代表者エム・エヌ・オストロフスキーの指導下にあり，そこにはツアーリ政府の三人の大臣が入っていた。その三人とは，蔵相，内相，国有財産相である。一方は，BЭO の評議会から選出され，ヴェ・イ・ヴェシニヤコフを代表とする16人の委員会である。この委員会は，長期に渉る審議の末，やっと1909年になって新しい内規の草案をつくったが，どの一つもツアーリ政府の賛成を得られなかった。

3. 1905年革命を堺としてそれ以後

(1)

20世紀のはじめは，BЭO の活動はいよいよ不活潑なものになり，単に文献を通じてだけのものになった。この時期の協会評議会のメンバーは，ブルジョア化した貴族であり，それが協会を指導していた。協会は無党派組織という立前であったが，評議会の大多数が後にカデット党の中核となった「解放同盟」に参加したことは，協会の政治的立場をはっきりとあらわしていた。

1905年の革命運動に押されてツアーリ政府が国会招集を約束したとき，BЭOの左翼は国会が革命的危機を解決することは考えていなかった。この時期の“Труды”に「国民集会の選挙について」[1] と題する記事がある。協会が提唱したのは「国民集会」であった。

1905年革命の軸となっていたのは農業問題であろう。農業問題の解決に当った BЭO が何よりも先に考えたのは，地主的土地所有の利益である。1904年に，統計学者エヌ・エフ・アンネンスキーを代表者とする農業問題委員会がつくられた。この委員会のメンバーの大多数,たとえば,エス・エヌ・プロコポヴィッチ，ア・ア・スタボヴィッチ，ヴェ・ヴェ・ヒジニャコフ，エリ・ヴェ・ホドスキーなどは，カデット党の積極的な党員となった。農業問題の解決に当ってかれらの打出した主張は，地主の土地の没収ではなくて，農民の生活水準の向上と農民への平等な市民権の分配とであった。BЭO の評議会は，国内に土地不足農民のいることを否定しなかったが，辺境への移住，ヨーロッパ・ロシヤの国家的土地フォンドからの分与，そして最後に，地主たちが農民に自由に土地を売ることによってこの問題は解決されるとしていた。1905—1906年の農民運動の原因を調べるために，BЭO は1906—1907年にロシヤ47県に及ぶ広汎な調査を行った。BЭO 第三部は1万4千部のアンケートを全県に配布し，回答1,400を得た。従来のアンケートが，精々数十通の回答を得たのにくらべて，この数はまったく記録的なものであった。この調査を積極的にすすめたのは，貴族ブルジョアジーではなく，主として学

---

1) “Труды”, 1905, т.2

者グループであった。すなわち，ベ・ベ・ヴェセロフスキー，ペ・ペ・マースロフ，ヴェ・ゲ・グラマン,ア・イェ・ロシッキー,エス・エヌ・プロコヴィッチ等である。トゥガン-バラノフキーは「問題を協会々員自身があらゆる側面から解明するために，無党派的，客観的，学問的に究明することは，ただ協会の中でだけ可能である」[1] と言ったが協会を超階級的な機関たらしめようとする試みは現実的には意味のないことであった。

20世紀の最初の10年間に BЭO の論壇に登場してきたのは，ペ・ベ・ストルーヴェ，イ・エム・ゴリドシュテイン，ベ・ベ・ヴェセロフスキー，エリ・ベ・カフェンガウス等である。シンジケート発生の原因，ロシヤの一層の資本主義化におけるシンジケートの役割等については，かれらの間に必ずしも統一した意見は見られないが，ともあれ，ロシヤの資本主義が西欧資本主義の発展の道を繰返しているという点で異論はなかった。

工業部門での独占連合との相関々係について，土地所有者たちの間には多くの問題があった。株主たち（石炭，金属，石油等）の土地所有の増大，銀行の役割の強化，外国貿易にむける独占的な価格政策，労働運動の激化等々である。

1914年，BЭO 第三部に「理論的諸問題研究委員会」が設けられた。この委員会で審議された主なる論題は，次の通りである。

経済の理論と応用の相関々係について

イエ・エス・ルウリエ，ペ・ベ・ストルーヴェ

私営独占の理論について

エス・オ・ザゴルスキー，ストルーヴェ

F.W. Taylor (1865-1915) の生産組織について

ペ・ア・シュピッツベルグ，ア・オ・グウシコ

(2)

第一次世界大戦に際し，1915年1月30日ツァーリ政府は，戦争状態の故を以てこのロシヤ最古の団体の活動を禁止した。しかし，評議会の活動は停止することなく続けられた。“Труды” は‘1915年の初めに発行し，遂にそれが最後のものとなった。

1914年末に，経済学教授ア・エス・ポスニコフを代表とする「戦争の需要のための特別委員会」が設けられ，国の財政状態，課税政策等の研究に当ったが，政府機関に入っていなかったので実際上の役割を果し得なかった。1916年，BЭO は全ソ都市同盟と一緒に「国の経済的問題に関するプログラム」の作成に参加した。

1917年の2月革命以後，BЭO の活動は再び盛り返してきた。ツアーリ政府は依然として圧迫し続けたが，このことは協会のブルジョア・グループの不満をよんだ。専制政府が倒れたとき BЭO は見事な転換を行った。曰く「協会は一再ならず前政権から圧迫されてきた。最近の25年間は，殆んどなきに等しいものにされてきた。偉大なるロシヤの革命のみが，協会に負わされた圧迫から協会を解放した」。[2]

---

1) ЦГИАЛ, ф. 91

2) Там же

2月革命以降，BЭO の中でブルジョアジーと小ブルジョアジーの中間層が強くなってきた。協会の名誉会員のポストも，顕官貴族ではなくて，小ブルジョアジーの代表者たちが占めるようになってきた。たとえば，エヌ・エス・チヘィゼ，ア・エフ・ケレンスキーなどである。

BЭO の行き方は，臨時政府のそれとまったく一致していた。BЭO の中で主要な問題となっていたのは，私的土地所有擁護の問題である。1917年4月，BЭO の下に，カデットの活動家エム・イ・ツガン-バラノフスキーを代表者とする農業改革連盟ペトログラード支部（農業委員会）ができた。6月には連盟の全ソ大会が開かれたが，そこで主張されたのは「私的所有権の擁護」である。この連盟のメンバーは，臨時政府の中央土地委員会の積極的な参加者であった。

10月革命に対して，BЭO の反革命的グループは，公然たる反対の態度をとった。革命政府は，BЭO にたいする物質的援助を止め，BЭO は静かにその幕をとぢた。BЭO の学者グループ，カ・ア・パジトノフ，ペ・イ・リャーシチエンコ，エヌ・ア・カブルココフ，ヴェ・ヴェ・スヴャトロフスキー，ヴェ・ヤ・ジェレズノフ等は，革命後も依然として学者としての活動を続けてきた。　（第二部終り，以下次号）

附記

Michael Confino 氏の近著 "Domaines et seigneurs en Russie vers la fin du XVIIIe siècle", Paris, 1963 は，その第一章を「自由経済協会報」に充て，数々の資料を呈しているが，すでに校正の後に入手したので，これまでのところで利用することができなかった。

О Деятельности Императорского Вольного Экономического Общества.

Ямамото Сатоси

Императорское Вольное Экономическое общество было основано в 1765-м году и присуществовало почти до Октябрьской революции. Среди 50-60 современных аналогических обществ, которые были созданы на Европейском континенте, только Вольное Экономическое общество присуществовало за сто пятьдесят лет. Если говорить об этом с точки зрения развития производительных сил в России, то подобный факт не является не рациональным. Другими словами, в этот период в России для развития производительных сил требовалось сильное руководство по технике вообще. Нельзя сказать что, на протяжение всего периода своего существования этого общества работало активно. Однако какую же всё-таки роль сыграло это общество для развития производительных сил в России на протяжение за сто лет (и больше Я.С.) своей активной деятельности? Автор статьи поставил перед собой задачу ответить на этот вопрос. Автор в своей работе останавливается на вопросах истории Вольного Экономического общества, а так же на положительной роли, которую оно сыграло в развитии техники вообще. В то же время он рассказывает об отрицательных сторонах деятельности общества, которые нашли свое выражение в защите последным интересов помещичьего класса. Историческая часть работы изложена в журнале "Slavic Studies" № 9, 1964 года. Вторая часть будет изложена в №10 того же журнала.